SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

コラム

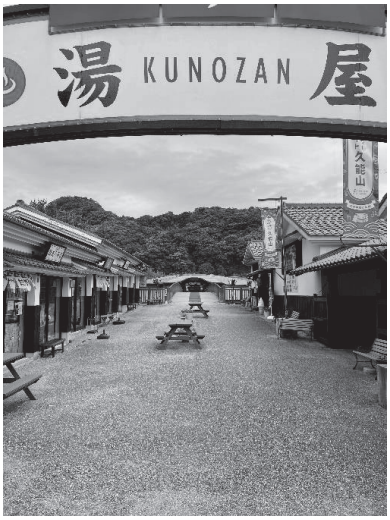
メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 光, 脊川, 碧志, 山口, ほなみ, ジン, タオ, 吉仲, 琉星, 竹内, 敦美, 山崎, 紗和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000605

コラム

久能のいい湯

伊藤光

私は 5 日間のフィールドワーク実習の最終日に、リバティーリゾート久能山の温泉を訪れたことが思い出に残っています。すべてのインタビューを終え、疲れた頭と身体で向かったリバティーリゾートには最高の温泉がありました。温泉に浸かりながら、当初思い描いていた実習とは大きくかけ離れてしまった 5 日間の実習を振り返りました。思い通りにいったことがほとんど無かったものの、久能の皆さんの親切心に助けられ、思いがけない出会いを経験することができました。また、温泉のある建物の外には昭和の日本の広告などがあるレトロ街もありました。5 日間の調査を終えても度々リバティーリゾートを訪れるようになり、私のなかでお気に入りの温泉のひとつとなりました。



リバティーリゾート久能山の入り口

レトロ街、昭和の広告たち

久能の美味しいご飯

脊川碧志

「不安」。これが、フィールドワークが始まった際の私の感情のすべてでした。私のテーマに沿った話を聞くことができるのか、そもそも私のテーマは他の人が見ても面白いのか、友人たちの話を聞くと不安は募るばかりでした。

そのような私の心を癒し、のびのびと実習をする力をくれたのはお昼ご飯でした。とても印象に残っているのは、久能山東照宮下にある、「家康食堂」です。実家のような内装をしている家康食堂は、温かい料理でいつも私を迎えてくれました。私が一番美味しいと思ったのは、ナポリタンです。一口サイズに丁寧に切られたウィンナーにシャキシャキと歯ごたえのあるピーマンが甘酸っぱいケチャップと絡まり、さらに粉チーズがそれらの味を包み込むように支え、絶妙なハーモニーを奏でます。刺激が足りない方はお好みでタバスコをかけるとピリッとした辛さがまたクセになります。実習中に3回もお邪魔させていただき、最終日にはリンゴをご馳走してくれました。あの時食べたリンゴの甘さは忘れません。実習が終わった今でも家康食堂にご飯を食べに行きたい、いいえ、食べに「帰り」たいと思いました。

久能の人々の温かさに触れて

山口ほなみ

調査に協力してくださった方々はとても親切な方たちばかりで、久能の人々の優しさや温かさに支えられた 5 日間でした。インタビューの際には、安居睦寿会の集まりのときに普段からやっているというゲームに混ぜていただき、とても楽しくリラックスした時間を過ごすことができました。また、「食べながらでも」と言って果物を持ってきてくださったり、うどんや葉ショウガをおすそ分けしてくださったりしました。特に印象に残っているいただき物は、安居睦寿会の会員の方にもらったジグゾーパズルです。パズル未経験の私にとってはなかなか難しいですが、仲間と楽しく制作しています。そのパズルは研究室に置いてあるのですが、同期の仲間や先輩がパズルを進めているのか、私が研究室に行く度に新たなパーツが出来上がっているので、パズルが徐々に出来上がっていく経過を観察するのが面白いです。時間はかかりそうですが、完成したら私たちの研究室に飾ろうと思います。安居は私たちが実習中の拠点としていた西平松公民館から少し離れていたため、私が歩いて帰ろうとしていると、「送るよ」と言って車で送ってくださったこともありました。初対面にもかかわらず、ここまで親切にしてくださった安居睦寿会の方々や久能の人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

いただいた葉ショウガと仲間

安居睦寿会の会員の方にもらった
制作途中のジグゾーパズル

久能の道

ジン　タオ（Jin Tao）

久能での主要な道路は 2 本ある。1 本が久能を貫く細長い久能街道であり、もう 1 本が久能と海岸を分かつ国道 150 号だ。

私は 2 年前の冬に、国道 150 号に沿って、初めて買った自転車を走らせたことがある。そのとき、北側の町（それが久能だと知るのはあとのことだが）と南側の海がまるで違う世界のように感じた。当時は、海辺で自転車を走らせるというちょっとした夢が叶って、注意力が町に向くことがほとんどなかった。「どうしてイチゴ農園の看板がこんなにあるのだろう」という薄いイメージしか残らなかった。

一方、今回実際に久能に入り、久能街道を走ってみたら、道が狭く、路面が少し凸凹だったので、やはり海側に目を向く暇がなかった（自転車歴が短いのも原因かもしれない）。なるほど、確かに別世界だなと納得する。海に面している町なのに、その海が町にとっての「外の世界」ということが実に不思議に感じる。「この国道 150 号のせいで、久能の人が海辺を利用できなくなっているのではないか」と久能の住人でもないのに勝手に不平を鳴らす私である。

そうだ、今度時間ができたら、またあの海辺に自転車を走らせてみよう。フィールドワーク期間中に周りの人たちに散々褒め倒されたけど、私だけが行けなかった、根古屋にある噂の家康食堂に行ってみないといけない。それだけが遺憾だった。

写真 1　久能街道と天羽衣神社を繋ぐ道
撮影：Jin

写真 2　久能街道と国道 150 号を繋ぐ道
撮影：Jin

久能太鼓を体験して

吉仲琉星

調査のなかで保存会の練習に参加させていただいた際、太鼓の演奏を体験させていただきました。私はそれまでに和太鼓の演奏の経験がなかったので、基本的な打ち方から教えていただきました。実際に打ってみると、打ち方を意識しながら両腕をそれぞれ動かすことが難しく、右、左、右…と交互に打ち込むことすらままならないほどでした。また、リズムを合わせることも大変でした。リズムを意識すると基本的な打ち方が出来なくなるなど、どちらかだけで手一杯になり、打ち方とリズムを両立させるのはとても難しかったです。練習後には、普段使わない筋肉だったためか、両腕の内側が筋肉痛になりました。

それでも、メンバーの方と音を合わせられたときや教わったとおりに演奏できたときには達成感が得られ、和太鼓の面白さを味わうことができました。お話を聞くだけではわからなかったことにも気付きを得ることができ、暖かい雰囲気の中で楽しく過ごすことができました。

久能小学校で保管されている和太鼓(吉仲撮影)

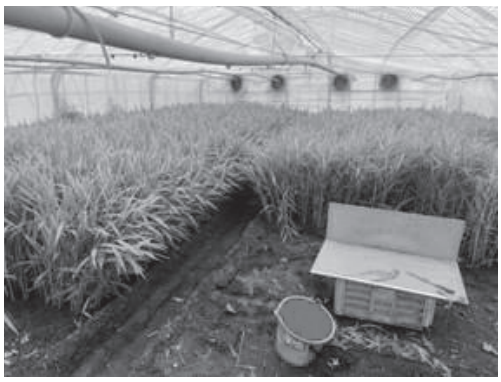
葉ショウガの出荷作業

竹内敦美

私たちがフィールドワーク実習を行った5月下旬から6月上旬は葉ショウガの収穫時期で、各地で葉ショウガの出荷作業をする人々の様子を見かけました。日中は気温が高いため午前4時からハウスで栽培している葉ショウガを収穫し、一旦朝食を食べてから8時ごろに出荷作業を開始するのが一日のスケジュールなのだそうです。出荷作業の様子を見学させてもらうと、耳栓をつけて高圧洗浄機で葉ショウガを洗ったり、110g～120gずつ葉ショウガを束ねたりする作業が行われていました。同じ地区や親戚の5、6人ほどが集まって世間話をしながら手を動かしている様子を見て、作業場が人々にとって重要なコミュニケーションの場になっているのだと感じました。

久能で育てた葉ショウガは主に東京に出荷されるそうです。また、味噌マヨネーズかめんつゆにつけて食べるのがおすすめだそうです。

葉ショウガを洗浄する様子



葉ショウガのハウス内の様子

フィールドワークの醍醐味

山崎紗和子

私は今回の実習で、人から人へつながって話を聞くフィールドワークの楽しさを感じることができました。報告書に載せた横山農園さんは、久能屋というイチゴ農園の方にインタビューをした際に、「横山農園さんはイチゴ狩りを始めた農園だから、イチゴ狩りならこの人に聞くといいよ」と教えていただいた農園であり、その久能屋さんは、一緒に調査をしている友人 2 人が、イチゴのスイーツを食べに行ったときに名刺をもらってきてくれたことがきっかけでインタビューをした農園でした。また、報告書に載せた B 氏は、下見の際に何度もお話しを聞かせていただいた石橋旅館さんからの紹介でインタビューができた方でした。このように、自分の選択以外にも、1 つの偶然や周りの人の行動によって出会う人が変わり、フィールドワークの結果が大きく変わることに面白さを感じました。紹介してくださった方々、紹介を受け、突然の電話にもかかわらず、インタビューに応じてくださった方々、本当にありがとうございました。

多くのイチゴ農園の方との出会いがあり、農園の数だけこだわりや思いがあることを知ることができたので、今度は 1 人の観光客として、イチゴ狩りを楽しみたいです。

B 氏をご紹介いただいた石橋旅館

2 人が久能屋で食べたイチゴのスイーツ